

右京七条一坊・藤原宮外周帶の調査

—第173-4次・第178-2次

1 調査経過（第173-4次）

本調査は大和平野支線水路等改修工事にともなう事前調査である。調査対象地は、藤原京右京七条一坊にあたり、周辺では、第62次調査で古墳時代の竪穴建物、藤原京期の掘立柱建物や区画溝などを確認している¹⁾。2012年度の工事範囲は、市道飛騨町木之本線の総長約120mで、新規掘削をともなう範囲のうち、2ヵ所に発掘調査区を設定した（東区・西区）。両区とも、掘削範囲は東西13m、南北1.3mであるが、3m分は土盛地として使用したため、調査面積は各13m²、計26m²である。それ以外の約100m分は立会調査とした。

発掘調査期間は、2013年1月21日から1月30日、立会調査期間は2013年2月14日から3月7日である。以下では、発掘調査対象とした東区・西区の調査成果について報告する。

2 調査成果

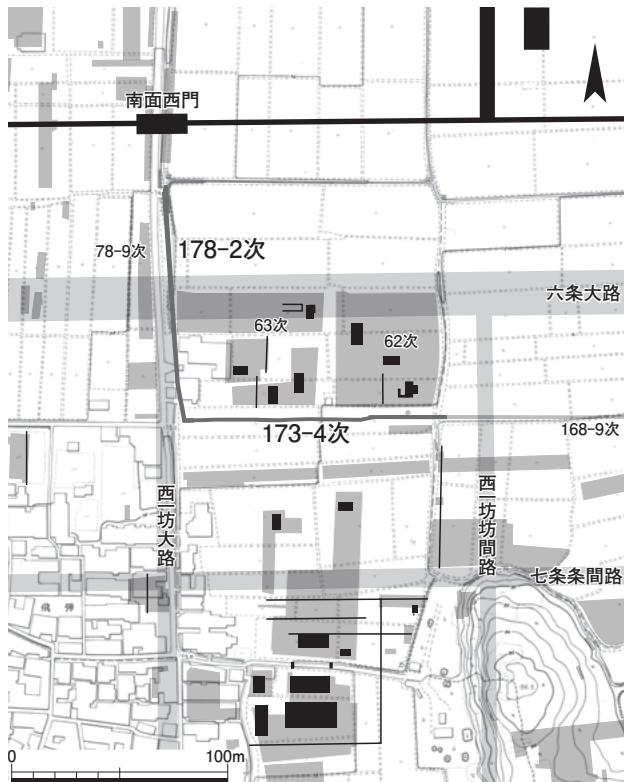
基本層序は、上から①アスファルト、②道路造成にともなう碎石・真砂土・粗砂層、③青灰色粘土層、④暗灰色細砂層、⑤緑灰色細砂層、⑥砂層の順である。検出した主な遺構は、東区で南北溝1条、西区で南北溝1条、柱穴列1条で、いずれも④暗灰色細砂層上面で検出した。遺構検出面の標高は、74.2～74.4mで、周辺の第62次調査や第168-9次調査とほぼ一致する。

東 区

南北溝SD11150　調査区の中央東寄りで検出した素掘溝。幅2.0～2.1m、深さ15cm。第168-9次調査で確認した南北溝SD11069から約7m西に位置する。SD11150とSD11069の溝心々距離は7.4mで、これらが西一坊坊間路の両側溝となる可能性もあるが、検出範囲が狭い点、出土遺物が少なく、詳細な時期決定ができない点など、検討課題も多く確定できない。

西 区

南北溝SD6511　調査区の西寄りで検出した素掘溝。幅0.45m、深さ10～15cm。第62次調査で確認している藤原京期の南北溝SD6511の南延長部分と考えられる。



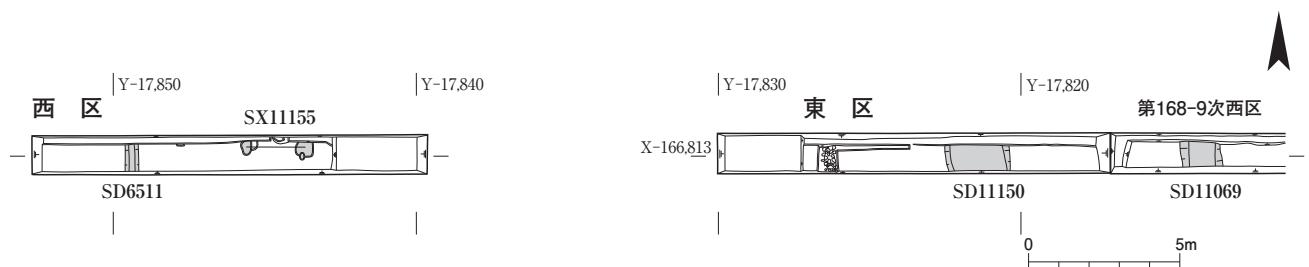
図II-16 第173-4・178-2次調査区位置図 1:3500



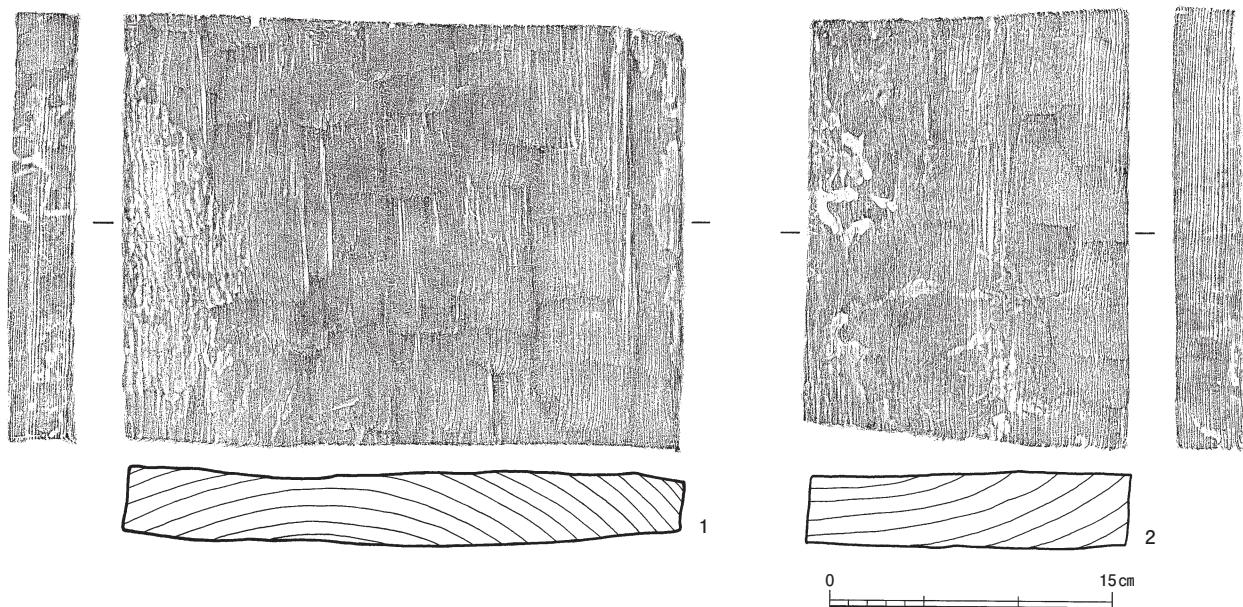
図II-17 柱穴列SX11155東側柱穴 板材出土状況（北から）

柱穴列SX11155　調査区東寄りで検出した柱穴列。2基の柱穴からなる。西側の柱穴は一辺35～45cm、深さ5cm、東側の柱穴は一辺60cm、深さ20cm。いずれも一辺20～30cm、厚さ3.5cmの方形の板材が出土した。

板材は、西側の柱穴では平置きの状態で、東側の柱



図II-18 第173-4次調査遺構図 1:250



図II-19 第173-4次調査 柱穴列SX11155出土木製品 1:4

穴では、柱抜取穴内で斜めに立った状態で出土し（図II-17）、礎板として利用されていたと考える。板材の特徴や柱穴埋土の状況はよく似る。西側の柱穴は、第62次調査で確認した藤原京期の南北堀SA6479の柱筋や掘立柱建物SB6480の西側柱筋と位置が揃うことから、この柱穴列も藤原京期のものである可能性が高い。（若杉智宏）

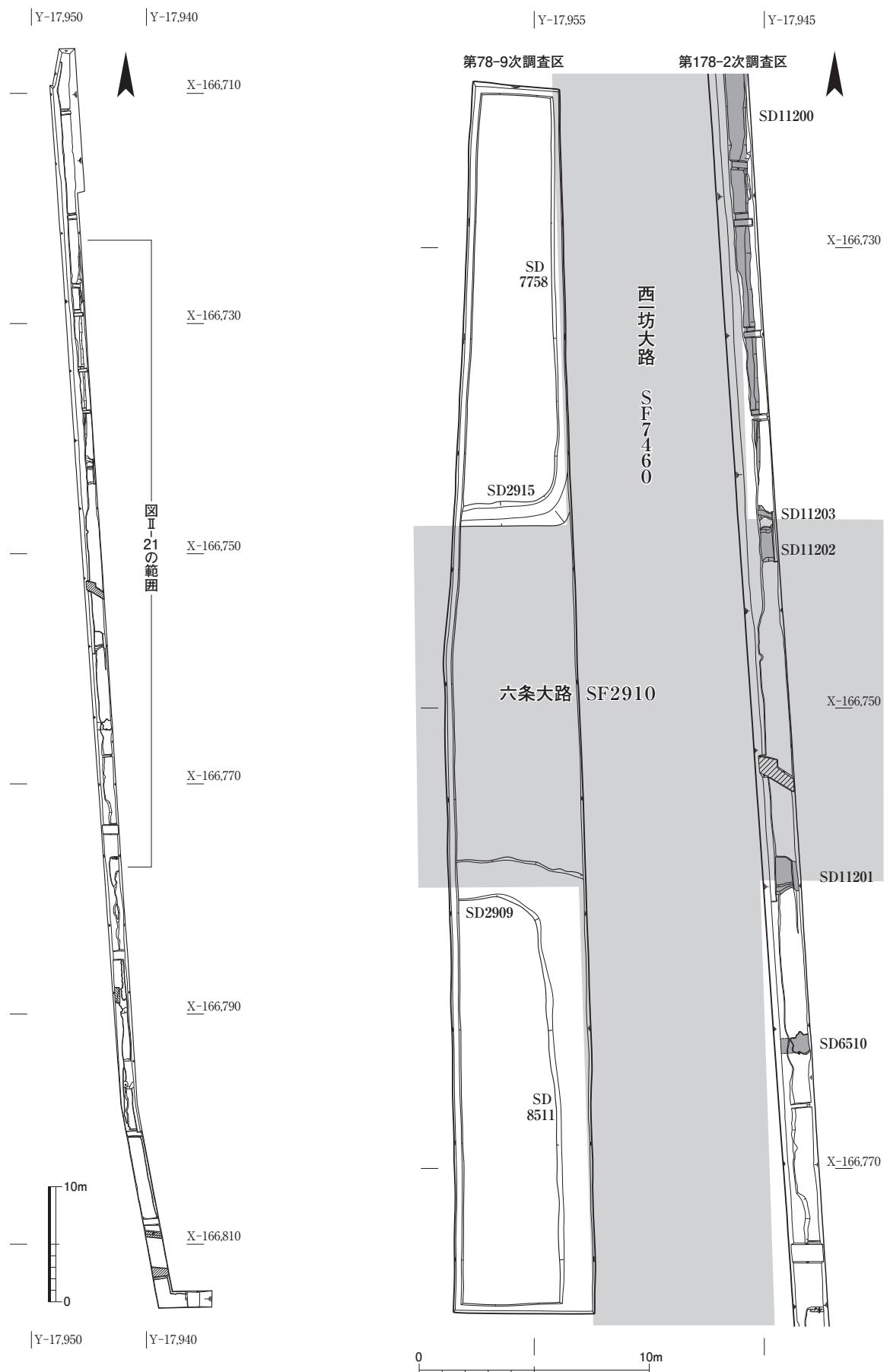
3 出土遺物

木製品 柱穴列SX11155から板状木製品2枚が出土した（図II-19）。1は、西側の柱穴から出土した29.5×22.5×3.8cmを測るヒノキの板目材である（樹種同定は藤井裕之による）。板目面と柾目面は平滑に加工されており、幅3～4cm前後のチョウナ痕が多数残る。一方、木口面にはチョウナ痕は確認できず、やや荒れた状態を呈する。両

木口ともに、隅部に2mm程度の段差が残っており、鋸による切断時の痕跡とみられる。

2は、東側の柱穴から出土したもので、23.4×17.0×3.8cmを測るヒノキの板目材である。加工は1と同様で、板目面、柾目面をチョウナで削って仕上げ、木口面は鋸による切断面を残す。1・2は形状のみならず、加工痕や木目の様相も酷似しており、一連の加工により成形されたものである可能性が高い。隣り合う柱穴から出土していることからも、礎板として使用されたものと推測される。（廣瀬 覚）

この他、本調査区からは、土器、瓦などが出土したが量は少ない。土器には土師器、須恵器などがある。また、青灰色粘土層からは馬齒が出土した。



図II-20 第178-2次調査遺構図 1:500

図II-21 西一坊大路・六条大路交差点付近遺構図 1:250



図II-22 第178-2次調査区完掘状況(X-166,729～-166,746付近 南から)



図II-23 南北溝SD11200 (X-166,728付近 北西から)

4 調査経過（第178-2次）

本調査も第173-4次調査同様、大和平野支線水路等改修工事にともなう事前調査で、調査地は藤原京右京七条一坊および藤原宮外周帶にあたる。周辺では、第63次調査で藤原京期前後の掘立柱建物や素掘溝などを²⁾、第78-9次調査で条坊道路側溝を確認している³⁾。本調査では、工事範囲の大部分が西一坊大路東側溝の想定位置にあたるため、工事区間のほぼ全域を発掘調査対象とした。調査区は幅約1.5m（一部2.4m）、南北約110mで、調査面積は、182m²である。調査期間は、2013年8月5日から9月13日である。

遺構検出面の標高は73.3～73.7mで、南が高く、北が低い。調査区全体にわたり、遺構検出面直上まで近現代の攪乱がおよんでいた。遺構検出面の標高は、周辺の第63次調査や第78-9次調査とほぼ一致する。

5 調査成果

調査区中央付近で、東西溝を2条、調査区北側で、東西溝を2条、南北溝を1条検出した。以下、各遺構の概要を述べる。

東西溝SD6510　調査区中央（X-166,764.5付近）で検出した素掘溝。幅0.70～0.80m、深さ5cm。後世の削平のため浅く、長さも東西0.70m分を確認したのみであるが、第62・63次調査で確認した東西溝SD6510の西延長部分と考える。

東西溝SD11201　調査区中央（X-166,757.0付近）で検出した素掘溝。幅1.3～1.7m、深さ30cm。東西1m分を確認した。検出位置が六条大路南側溝の想定位置とほぼ一致しており、六条大路南側溝の可能性がある。

東西溝SD11202　調査区北側（X-166,743.0付近）で検出した素掘溝。幅1.5m、深さ25cm。東西0.70m分を確認した。検出位置は、六条大路北側溝の想定位置から南へ約1.5mの場所である。

東西溝SD11203　調査区北側（X-166,741.5付近）で検出した素掘溝。幅0.35～0.65m、深さ15cm。東西0.70m分を確認した。検出位置は六条大路北側溝の想定位置とほぼ一致するが、幅・深さともに小さく、条坊側溝と断定するのは難しい。

南北溝SD11200　調査区北側（X-166,740.3～-166,710.4）で検出した素掘溝。深さは50cm、確認できた長さは南北30m分である。検出できたのは東肩のみで、幅は0.85m以上。検出位置は、西一坊大路東側溝の想定位置とほぼ一致しており、西一坊大路東側溝の可能性が高い。

6 出土遺物

本調査区からは、土師器、須恵器、弥生土器、瓦器、瓦などが出土した。出土遺物の多くは、近現代の攪乱にともなうものである。

7 まとめ

2カ年度にわたる調査成果をまとめると、第173-4次調査では、2カ所の調査区で南北溝2条、柱穴列1条などの遺構を検出し、第178-2次調査では、東西溝4条、南北溝1条を確認した。周辺の調査区の状況から、その多くは藤原京期の遺構の可能性が高い。そのなかでも、東西溝SD11201・SD11202、南北溝SD11200は、位置関係から条坊道路（六条大路・西一坊大路）の側溝の可能性がある。両調査とも、水路付け替え工事にともなう調査で、幅1m強の狭小な調査範囲ではあったが、藤原京期と考えられる遺構の存在が確認できた。藤原京研究の進展には、このような地道な調査成果の積み重ねが今後も必要と考える。

（若杉）

註

- 1)「右京七条一坊・二坊の調査（第58-17次等）」『藤原概報20』。
- 2)「右京七条一坊の調査（第63次等）」『藤原概報21』。
- 3)「右京六・七条二坊の調査 第78-9次」『年報1997-II』。